

「神から賜ったもの」

ヨハネ福音書 7 : 37~44

8月の厳しい暑さの中で78年前に終戦となった戦争とその犠牲となった人々を偲びました。この時期になると新聞の「声」欄等にも戦争時の体験や思いが投稿されています。戦争では自国の正義を主張しますが、「正義を訴えるよりも、自国はもちろん相手国の人間も大事にしている、という発信が重要です。戦争で人が死ぬことはより深刻に捉えるべきで、『正義の戦争』はありません。」と一昨日の新聞にも論ぜられていました。戦争体験者たちが少なくなってきた今、その人々が戦争の歴史を検証、反省し、風化させてはならないと言っています。

先の大戦で日本では230万人の人々、特に若者たちが戦死しました。戦後「男一人にトラック1台の女」と言われるほどになったと回顧している人もいました。人の生命が粗末に扱われる。これは真の神を知らないからです。

日本は戦前まで、神国日本、天皇は現人神としての思想がありました。その天皇のもと赤紙1枚で戦争へと駆り出されました。終戦により天皇は「人間宣言」なるものを発しました。もちろん、そのようなものを発しなくとも、日本は神国ではありませんし、天皇も現人神でないことは、今は誰でもが承知の事実です。

真の神は生命をこよなく愛するお方です。人をご自身に似せて創造されたほどに愛しておられるお方です。そしてイエス様は「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるのでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。」(マタイ 16:26)と、生命は全世界よりも重いこと、そして、それを失った人間のために、ご自身のいのちを差し出すことを暗示しておられます。生命は神の賜物です。私たちはその生命を神から賜っているのだと、もっと強く自覚すべきです。イザヤは言います「今、聞け、わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだイスラエルよ。あなたを造り、あなたを母の胎内にいるときから形造り、あなたを助ける主はこう言う。恐れるな。わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだエシユルンよ。わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ。」(イザヤ 44:1~3)と。そうです、私も、あなたも、そして地上のすべての人が神から生命を賜っているのです。でも、生命には肉体的生命とともに、神に繋がる霊の生命があることを心に留めましょう。

「祭りの終わりの大なる日」(: 37)とある。この祭りは「仮庵の祭り」と呼ばれました。刈り入れ、収穫を祝う祭りです。収穫の時、時間を惜しんで、泊りがけで作業するため急ごしらえの仮小屋を造り、仮庵生活となったのです。しかし、この祭りはそれ以上に、霊的意味を持っていました。

イスラエルの民は神のみ心をなす神の民となるため、エジプトの奴隷生活から導き出され、約束の地に入るまで40年、仮庵(テント)生活をしました。そしてその中心が幕屋であり、彼らはここで神を拝し、み旨を伺いました。カナンの地に定住してからはこの幕屋が神殿となりました。そして、仮庵の祭りの間、犠牲を捧げ、毎日シロアムの池から運ばれた水が神殿の祭壇に注がれました。そしてこの祭りの最後の日是最も大事な日とされていたのです。イスラエルの民は長い年月のうちにいつしか、これを儀式的に行うことで、自分たちは清められた神の民と思うようになっていまし

た。しかし、宗教儀式で人は清められません。儀式が神の民とするのではないのです。また、神殿のみが神の臨在の場所でもない。もしそのように考えるなら、神殿が偶像になっていると言わねばならないでしょう。ソロモンが神殿を建てた時、何と言われたでしょうか。「ソロモンが神のために神殿を建てました。しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。『天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたは、わたしのためにどのような家を建てようとするのか。』」(使徒の働き 7 : 47~49)とっています。

神は信仰をもって祈る人と共にそこに居られるのです。

ところで、イエス様を捕えようとしている祭司長たちとパリサイ人たちとはどんな人々だったのでしょう。祭司長たちは神殿を中心とした権威主義、形式主義に陥っており、サドカイ人とも言われていました。そのような祭司長たちに対抗して民衆から立ち上がった宗教指導者たちがパリサイ人です。彼らは聖書学者たちを中心とした律法主義者たちでした。モーセ五書と共に、預言書、諸書、口伝律法まで権威ある伝承として守ることを強い、ある意味では誰も律法を完全に守ることは困難な状態でした。実際、パリサイ人たちが自身さえ律法を説くことはできても、守ることは出来ませんでした。それゆえ、信仰は形骸化してしまったのです。律法を説くが守れない、それゆえイエス様はパリサイ人を「偽善者たちよ」(マタイ 15 : 7)と叱責しています。

イエス様はこのように形骸化してしまっている祭司長やパリサイ人たちだけでなく、民衆の心の目を覚まそうとして語られました。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」(: 37~38)と。イエス様はご自分が救い主として来られたことを宣言しておられるのです。「あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から。」(イザヤ書 12 : 3)。「彼は私を神殿の入口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東の方へ流れ出ている。…この水は東の地域に流れて行き、アラバに下って海に入る。海に注ぎ込まれると、その水は良くなる。この川が流れて行くどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水が入ると、その水が良くなるからである。この川が入るところでは、すべてのものが生きる。」(エゼキエル書 47 : 1, 8~9)と預言されています。

そればかりでなく、「イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ下っていなかったのである。」(: 39)とヨハネは記します。救い主としての預言が成就するためには、イエス様は人間のために、ご自分が十字架で罪を贖い、死なねばならないこと。そして、父なる神のもとへ帰らねばならないことをご存知でした。なぜなら、聖霊によってしかこの救いの真理は理解できないからです。イエス様がこう語られたこの時、この福音書を書いた愛弟子のヨハネさえ、この事を理解していませんでした。イエス様はまだ十字架の死を遂げておらず、天に帰っていないため、別の助け主としての聖霊はまだ下っていなかったからです。だから群衆が『この方は確かにあの預言者だ』と言う人たちがいた。別の人たちは『この方はキリストだ』と言った。しかし、このように言う人たちもいた。『キリストはガリラヤから出るだろうか。キリストはダビデの子孫から、ダビデがいた村、ベツレヘムから出ると、聖書は言っているではないか。彼らの中にはイエスを捕えたいと思う人たちもいたが、

だれもイエスに手をかける者はいなかった。』」 (: 40~44)と混乱しているのは当然です。イエス様は業をなし終え、聖霊として地上に戻るために昇天されました。そして、聖霊として降って来られたのです。このイエスの聖霊を受けたことで、初めて、直弟子たちさえ、もちろん、私たちも救いの真理を理解できたのです。この聖霊こそ、人と神を繋ぐものであり、最高の恵み、神からの賜りものと言えますでしょう。

心の渇きを潤すのはこの聖霊・生ける水だけです。そしてこの生ける水は心の表面だけ潤すのではありません。つまり、自分だけが神の恵みを受け満足できれば良いというものではありません。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」 (: 38)とあるとおり、心の奥底まで潤される時、生ける水は泉となって湧き溢れてくるのです。生ける水は川となって流れ出、他の人々の心をも潤すでしょう。私にそんなことが起こるだろうか？ 私にそんなことが出来るだろうか？と心配する必要はありません。これはイエス様の約束です。必ず、信じるすべての人に起こるのです。私たちがなすべきことは心配ではなく、感謝することです。イエス様が生命を懸けて成してくださった十字架の御業を、私のためと信じることです。心の奥底まで信じ切って、イエス様を心の王座に据えるなら、イエス様の愛があなたの心の奥底から、生ける水となって湧き溢れてくるでしょう。主を褒め称えましょう！